

厄神の祭祀と正月行事

はじめに

民俗としての正月行事は多様な要素がからみあつていて複雑であるが、年初にあつての年神祭祀は正月行事のもつとも基本的な要素のひとつである。ひとくちに年神とはいつても、各地での祭祀の分析から、その性格は祖先神、田の神などさまざまに考えることができ、全国規模でみると、これもまた単純ではない。しかし、その靈力を得て豊かなる一年を過ごすべく、暮れから正月にかけて積極的に迎え祀ろうとしている神であることでは、どこにおいても

一致している。

ところで、暮れから正月にかけては、このような靈力に期待して好んで祀ろうとしているとはとても思えない神祭祀の伝承が、年神祭祀とかかわらせながら行なっていると解釈せざるをえない形で、全国の少なからぬ地に分布している。この神は、厄神とか疱瘡神と呼ばれていることが多い。厄神・疱瘡神というと、一般には、はなから防遏したり退散させようとはかり、その方法がさまざまな形をとつて各地で年中行事として定着しているが、暮れから正月にかけてのには、防遏・追放の例も多いとはいえ、まずは迎えて祭祀の対象としようとする例が少なくないのである。

田 中 宣 一

小稿の目的は、結局は退散に追いこもうとの心意に支えられたものではありながら、とにかく、年神祭祀をそのいっぽうに意識しながら営まれていると考えざるをえない、暮れ（特に大晦日）から正月にかけての厄神・疱瘡神・カゼの神等々の好ましからざる神々祭祀の実態を明らかにし、それらがわが国の年中行事研究のなかにどのような位置づけられるのか、また、わが国の、年中行事を含めた祭祀の構造を考究するうえでこれがどのような示唆を与えてくれるのかを、問おうとするものである。

一、「厄神の宿」の持つ意味

大晦日から正月にかけての厄神（疱瘡神等も含む）祭祀の各地の事例は、ヤクジンノカミダナ（岐阜県美濃市付近・ヤクビヨウガミマツリ（香川県小豆島）等々として、のちに『総合日本民俗語彙』にも紹介されることになるが、この民俗が多くの研究者に注目されるようになったのは、昭和二十七年に丹野正氏が「厄神の宿」¹を発表してからであろう。丹野氏は、おおよそ次のような山形県内の事例を紹介している。

（山形県山寺村〈現山形市〉のK家では）すっかり暗くなり、いよいよ年取りにかかる直前、入浴をすませた主人（戸主）が紋附・羽織・袴の礼装で、提灯を手にひとりで、訪れてくる厄神を迎えにゆくのである。真白な雪を踏んで、こっそり部落の入口の橋のたもとに来ると、姿なき神に向って丁寧にお辞儀をし、

「厄神の神様、早かったなす、お疲れだべす、なんぼ寒かったべす。どうか、おら家さござってけらっしゃい。お迎えに来たつす」と小声で挨拶をする。

そして先に立って家まで案内し、入口の戸をあけ、「ここでござんす。入ってけらっしゃい」と招き入れ、さらに、「さあ、上ってけらっしゃい」と内に上げて、ずうっと一番いい奥座敷に案内する。

さてそれから、「さあどうか坐ってけらっしゃい」と座布団をすすめ、坐らせておいて、用意のお膳運び、灯明をつけて、「粗末なものですが入ってけらっしゃい。来年も皆、まめで稼げるよう守ってけらっしゃい」と挨拶し、拍手を打って拝む。続いて家の者も一同、奥座敷に来て拝む。

「年取りママ」と呼ばれるお膳につづいて年取り餅

も供える。囲炉裏で大火を焚いているなか、家族一同が年取りの食事をすますと再び主人が奥座敷に入り、「お粗末でござんした」といって、お膳をそのまま床の間に上げて客用の夜具を敷き、「お疲れでござんしようから、ゆつくり休んでけらっしゃい」といってから退出し、その夜はそれっきり奥座敷には入らないのである。

この年取りの夜は主人は眠らずに、「年取り根っ子」の燃える大火を守ることになっているが、未明の午前二時ごろ、まだ元旦参りの人々も通らない早いうちに奥座敷に行つて、「暗いうちに立つてけらっしゃい」といって厄神にお茶を出し、家族で再び拜んだあと、迎えてきたのと同じ橋のたもとまで厄神を案内する。

そして、橋のたもとでは、「お粗末しました。来年またござつてください。今年はどうござらねでけらっしゃい」と丁寧挨拶し、厄神に供えておいたものはみな川へ流してくるのである。(傍点は筆者。以下、各事例の提示においても同じ)

以上であるが、「迎えにゆく時はどんな気持ちです」との丹野氏の問いに対して、K家の戸主は「気味わるいもん

ですなあ」と大真面目な返答だったというから、厄神の信仰は生きていたのである。

報告者丹野氏も指摘するように、これは、能登のアエノコトの田の神迎えと、神迎えの形式において酷似している。そして丹野氏は、丁寧な神迎えの形式からみて、正月の祖霊迎えの変形したものかと解釈したのである。この解釈は、後述するように三崎一夫氏によって疑問視され、大島建彦氏によつても疑問視されるのであり、筆者も丹野氏の解釈に与するわけにいかないのであるが、この報告事例は、好資料として残るであろう。とくに筆者が注目したいのは、大晦日夕刻にわざわざ厄神を迎えて接待し、そのあと早々に、迎えたときと同様丁寧を送り出してしまふ点である。年神と一緒に、正月のあいだじゅう祀りつづけるわけではないのである。

正月とは好ましい靈力を賦与してくれる年神の祭祀の機会だとする常識にとつて、右の厄神祭祀の事例は一つの衝撃であった。

さつそく、大島建彦氏は、年中行事には祖霊信仰を基盤にしたものと御霊信仰に基づくものがあると説く論考²⁾において、この事例を取りあげ、年神と厄神の關係は益行事

の精霊と外精霊のそれに類似するとみ、正月行事と盆行事が構造上一致するという説の一傍証と考えた。すなわち、正月にも、年神・祖霊と考えられる神以外の、悪霊を祀ることがあるのだと強調したのである。

これを受けて三崎一夫氏は、地元宮城県をはじめ全国各地の、正月に厄神・疱瘡神・カゼの神等々の悪神・悪霊を祀る多くの事例を列挙し、大島氏同様に、正月には、年神だけではなく厄神等々を祀る性格のあることを確認した³。そしてその祀りかたを、次のように二形態に整理したのである。

第一には、大晦日の年取りの夜、部落の入口や辻などいづれ家の外から疫神を迎え入れ、特別に棚を作るか奥座敷に案内して歓待し、明くる元日の早朝送り出し、来る年の疫神より蒙る不幸を除こうとするもので、この場合の神はヤクガミまたはヤクジンと呼ばれている。

第二としては、年取りの夜から正月中、神棚か年棚の傍に他の神の供物とは区別された餅や膳が供物され、疱瘡に罹らないことが願われ、対象とされる神は多く疱瘡神と呼ばれている。

三崎氏は、これらの行事は、「来る年の疫神より蒙る不幸を除こうと」したり「疱瘡に罹らないことが願われ」て行なわれているのだと解釈した。各事例をみるかぎり、もつともな解釈かと思われる。

大島建彦氏は、「疫神祭祀の民俗」⁴をまとめて再びこの問題に言及された。同論考は、大晦日とならんで重要な年越の機会だと考えられていた節分に各家を追われた鬼をもてなす伝承とかかわらせながら、大晦日から正月にかけての厄神祭祀を考えようとしたものである。ただ、節分の鬼歓待の伝承は興味深いし、先の論考からこの論考にいたるまでの同氏の厄神に関する研究成果がちりばめられているが、大晦日から正月にかけての厄神祭祀にかぎっていえば、この論考は、先の同氏の論考の内容や三崎氏の見解を発展させたものとはかならずしもなっていない。

かくして、現段階での、大晦日から正月にかけての厄神や疱瘡神など常識的には歓迎されざる神々祭祀研究の成果は、次のように要約することができる。

(1) 正月にも、年神などと一緒に悪神邪霊を祀ろうとする考えが広く行なわれている（あるいは近年まで行なわれていた）。これは、盆行事における外精霊の祭祀と対比させる

ことが可能な伝承で、正月と盆両行事類似説の有力な根拠の一つといえる。

(2) 祀りかたは、歓待といつてもよいような感じでわざわざ迎え入れるのと、年神棚とか一般の神棚のかたわらに、それらとは別にひっそりと（あるいはやや粗末に）供物して祀るのとの、二方式に類別できる。

このような従来の研究成果のうえに、筆者はさらにつづけて、これら厄神の祭祀が、わが国の祭祀の構造上持つ意味について問うてみたい。

二、諸事例の検討

大晦日から正月にかけての厄神や疱瘡神祭祀の各地の事例は、すでに述べたように、三崎一夫氏によって二大別されている。大筋においてこれに異論があるわけではないが、小稿においては、論を進めるうえでA・B・Cに三大別して考えることにしたい。なお、事例の提示は全国なるべく広い範囲にわたるようにし、かつ紙数の関係上、必要最小限にとどめる。

事例A1 宮城県七ヶ宿町では、トシヤ（年取りの夜）には

正月の神を迎えると同時に、厄神（やくがみ）をも祀っていた。この夜、年神へと同じ供物を厄神に供え、あとでそれを村境に送り出すか川に流すかしているのであるが、とにかく厄神を早く追い出そうとしていたという。細部は家によって異なるが、例えば同町関の某家では、この夜、年神に供えるのと同じ献立の膳を、厄神と疱瘡神とに供えるといつて二つ用意し、主婦が夕刻にその膳を兩戸を開いて縁側に供え、「疫病神さま、疱瘡の神さま、早く食べて帰ってけらつしやい」と唱え、この膳のものは下してから子供に食べさせるのである。

事例A2 山形県山寺村（現山形市）の例。これについては

先に詳しく紹介しておいた。

事例A3 福島県飯館村大倉の某家では、年取りの夜、厄神、エビス・大黒、年神に対して三つの膳を作って供え、厄神の膳のものだけは紙に包み、「今晚年取って明日の朝早くお立ちになってください」といって、川に流すか、十字路になっている道端に送る。

事例A4 東京都多摩市一ノ宮地区の某家では、大晦日の夜、半紙を敷いた台を座敷に出して、そこにオスワリ

(供え餅)と灯明を供える。灯明は大根を輪切りにしてそこに蠟燭を立てたもので、これらは厄神への供物だと考えられている。「厄神さまは、一夜の宿」といつて一晩だけ祀るのだといい、大根は元旦のまだ暗いうちに川へ流し、オスワリは「乞食にやれ、自分のところでは食べるな」といつている。また、同市和田地区の某家では、棧俵に幣束を立てたものをヤクジンサマとして床の間に祀るが、大晦日の夜、盆に灯明、塩、そばなどをのせ、戸主が切り火をきつて、それらの供物を床の間の厄神へ供えた。厄神への供物は、年が明けると同時に下げた。

事例 A 5 神奈川県伊勢原市池端には厄神を祀っている場所があり、大晦日の夕方、近所の人が線香を持って迎えに行く。その時、「厄神サン厄神サン、今晩一夜の宿をいたしますから、年内無事によろしく願います」と唱え、家に戻ると、すでに準備してある祭壇(年神棚の下に小さなチャブ台などを出し、その上に供物と線香立てなどを置いたもの)に礼拝する。厄神は新しい年の厄払いのために大晦日一晩だけ泊めるのだと考え、元旦の朝、雑煮などを供えると早々に祭壇を片づけてしまう。

事例 A 6 神奈川県鎌倉市笛田では、大晦日の晩に厄神が

一夜の宿を貸してくれといつてやってくるのだと信じられ、小さな神棚をこしらえて、これに灯明とカツの木(白膠木)を三つか四つに割った棒を供える。こうして一夜の宿をしてやると伝染病に罹らないという。厄神棚は大晦日に作って元旦には海に流してしまいが、正月三ヶ日間か七草までそのまましておく家もあるようである。なお、厄神棚を設けるようになったのは、昔、大晦日にやってきた千ヶ寺参りの人を一晩泊めてやったところ、教えてくれたのだという。

事例 A 7 岐阜県美濃市付近では、大晦日の夜に厄神棚を設け、灯明を点じ供え物をしている。大晦日の夜、他に行くところのない厄神に一夜の宿を貸して、疫病をまぬがれさせてもらうためにするのだと考えられ、この棚は、元旦早朝には取り除いて氏神のかたわらにある納め場所に送っていくという。

この A 1 から A 7 の事例は、積極的に迎え入れて祭祀を行ないながら、年神祭祀とは異なって、わざわざ早く帰って行ってくれと唱えたり一夜の宿と割りきっていたりする例である。とにかく祀ることは祀るが、霊力の賦与には期待

していない。強いて言えば、その靈力のおよばないことを期待して祀っているのである。この心意は供物の処理にもあらわれていて、神との共食の意図は全くみられないのである。

この事例で考えるべきは、靈力に期待しないのなら祀らなければよいはずであるが、とにかく迎えに行つて祀ろうとしている点、また、わざわざ迎えてまで祀ろうとしているのなら年神などと同じく正月の間じゅう祀りつづければよいのに、早々に送り出そうとしている点である。歓待はしないがとにかく祀らなければならぬと信じ、そして、本格的な年神祭祀よりも早めに祭祀を完了させようとしている点に注目しておきたい。

事例B1 青森県東通村岩屋では、大晦日の夜、年越しの馳走を神棚に供えたあと、セチをするといつて、戸主が松明二本に火をつけて門口の東の方の雪のなかにそれを挿して拜んでくる。この火で無縁仏が手をあぶるのだと信じ、これが終わってから家族で年越しの膳を囲む。

事例B2 宮城県石沼市には大晦日の夕食前に雨戸を少し開け、「厄人の神、お年をとつておいで」といつて招く

風があつたという。これで厄難からまぬがれると信じられていたのである。

事例B3 福島市飯坂町茂庭の中茂庭では、大晦日の夜、道の十字路に行き、「さあ、厄神の神さま、おれ家に行つて年取つてくなんしょ」といつて厄神を家に迎えてき、床の間に松竹梅と水などを供えて正月三日間拜む。同じく田畑では、座敷の年神とは別に、勝手の戸棚のなかに厄神の膳を用意して三日間供え物をする。

事例B4 茨城県明野町の赤浜の某家では、大晦日にカゼの神を納戸か奥のへヤの人に見つからない暗い戸棚の奥に祀り込む。「一月二十日まで私の家に宿をとつていただきたい」といつて、紙を敷き藁ポッチに供え物をのせて供えるのだが、特に依代は設けていないという。そして、正月の間じゅう他の神々と同様に供え物をしたあと、一月二十日には、それまでに供えた物を一まとめにして紙に包み、人家のない集落のはずれの辻角まで持つていつて送り出す。その際、「私の家に二十日いたのだからどうかこんどはよそへ行つてもらいたい」とことわりを言うといふ。

事例B5 神奈川県相模原市田名の某家では、十二月三十

日午後、厄神の棚を作る。この棚は、割り竹をすのこ状に編んで、そこに赤と青の幣束を立てたもので、何の神も祀っていない納戸の、ちょうど仏壇の裏側に相当する位置に吊すのである。そして同日夕方、ミソカソバの支度もすつかり整うと、戸主が風呂に入つて着物を着替え、納戸の戸を開けて、「ほうそう神さま、やくじんの神さま、いちやの宿をいただきます」と、外の暗闇に向かつて呼びかける。そのあと、厄神棚に神酒とミソカソバを供え、納戸の戸は開け放つたまま、家族は他の部屋でミソカソバを食べるのである。家人がミソカソバを食べ終えるまで納戸の戸は開けたままにしておく。迎えた厄神には正月六日まで供え物をしつづけ、七日に他の正月飾りと一緒に厄神棚を撤去するのである。¹⁸⁾

事例 B 6 静岡県南伊豆町の妻良地区では、大晦日の夜、門口のところで「ほうそう神さん、トシヤド(年宿)を貸せるからござらっしゃい」と呼ばわり、年神棚に瘡瘡神を併祀して供え物をした。これらは、かつて静岡県東部各地で行なわれていたことだといふ。¹⁹⁾

事例 B 7 奈良県御所市秋津の某家では、大晦日の夜、主婦が箕を持って道の四つ辻に出て行き、何かをすくう真

似をして戻ってくる。そのあと、箕を奥の部屋の屏風で困ったなかに置いて、餅一重ね・吊し柿・蜜柑などを供えるのであるが、このことは、瘡瘡神に宿を提供しているのだと信じられている。²⁰⁾

事例 B 8 香川県小豆島では大晦日の夜、家の近くの四つ辻へ行つて、「瘡瘡の神さん、カゼの神さん、正月三日はわたしのうちへ、神床をつくつてお祀りするために迎えにきました。常の日はどうぞお出でくださるな。さあ、わたしの肩へお乗りなされ」と言いながら、両手を背にまわしてこれら厄神を背負うかっこうをし、「よいしょ、よいしょ」と言いながら家へ戻ってくる。家の二ワに入ると、「どっこいしょ、ああ重かった」などと言いながら厄神を背から下ろす真似をする。そのあと、二ワの片隅に紙を敷き、餅を供え、夜は灯明を点じて正月三日間は瘡瘡神・カゼの神を祀りつづけ、三ヶ日がすぎると、迎えたときと同じかっこうをしながら、もとの四つ辻へ送り出すのである。²¹⁾

この B 11、B 8 の事例は、わざわざ迎え祀ろうとしている点や、迎え祀ろうとしながらも年神とは差をつけて(あ

るいは粗末に祀ろうとしている点で、先のA1〜A7の事例と共通しているが、一夜だけの宿と割りきって翌朝未明など早々に送り出そうとしていない（あるいは早々に送り出すことを強調していない）点で、相違している。同じように明らかに迎えて祀ろうとしている事例ではあるが、AとBに類別したゆえんである。すなわち、B1〜B8は、差はつけながらも、多くが年神と同じ期間だけ祀ることに抵抗を感じていない例だといえることができる。

ところで、いままでみてきたA1〜A7、B1〜B8のような例は、全国的にかならずしも多いわけではなく、また、事例中においてしばしば某家ではと断っておいたように、同じ地域のほとんど全ての家で行なわれているわけではない。特定の家の行事として、他家にはあまり知られることなく伝承されてきたものである（報告例が少ないのはそのためもあるだろう）。それにはあるいは何か隠れた理由があるのかも知れないが、伝承を保持してきた各地の特定の家々に共通する性格の解明ができないことには何とも言えない。

しかし、現在明らかになっている事例でみるかぎりでも、東日本にやや偏在しているとはいえ、伝承は全国の広

い範囲に分布しているのであり、けっして特殊な地域の特殊な伝承でないことは確かである。小稿で意図しているように、これらの伝承から、わが国の、大晦日から正月にかけての神迎え・神祭りの性格の一斑を理解しようとしたり、わが国の祭祀の構造を考究しようとすることは可能であろう。

事例C1 宮城県金成町長根の某家では、大晦日から正月のあいだ、年神などに供えるのと同じ膳を中間のうしろのオカミの出窓に供える。この疱瘡神への膳を整える際には、年神の膳などと一緒にするものではないといつて、二つの膳を離すようにしている⁽²²⁾。

事例C2 宮城県大和町吉田の某家では、大晦日の晩から正月三ヶ日間、ヤクジンノカミに供えるのだと考えて、神（年神など）に供えるのと同じ食物を膳にのせて流しの下に供える。これは人が食べるものではないといつて、あとで犬に与える⁽²³⁾。

事例C3 東京都三宅島の阿古では、大晦日には神着（同じ三宅島の集落名）から御太刀が来るから外へ出ることはもちろん、外を向いてもいけないという。そのかわり、

縁側だけは少しあけておき、座敷には馳走をのせた膳を用意しておく。夫婦はその座敷で寝てはいけない。

事例C4 神奈川県三浦市の南下浦町丸山・皆和田では、大晦日に、土間に祀つてある臼神の近くに棧俵を三方から縄で吊つたものを吊し、棧俵の上に幣束などを立て、正月三ヶ日間雑煮を供える。このことを厄神の年宿をするといい、四日朝早く、その棧俵などを林の木に縛つたり、道の辻に送り出したりした。

事例C5 新潟県佐渡郡の金沢村（現金井町の一部）では、大晦日の晩、悪神さまにお供え申すといつて、飯を器に盛つて床の間に置く。正月七日にそれを下ろして、鼠が食つたか否かによつて豊凶を卜すという。

事例C6 兵庫県竹野町二連原では、大晦日の夜、年神へとは別に、トビといつて吊し柿・白米・小さく刻んだ昆布を紙に包んで家族の倍ぐらの数作り、床の間の疱瘡神に供える。このトビは、正月になつて初めて出て行なう行事の際、全て持つて出て供えるという。

事例C7 岡山県真庭郡新庄村の某家では、年神棚の前の下の方に、棧俵に柴を立てた形の疱瘡神を祀つていた。そこに供えた疱瘡の餅は、ホトホトとして訪れた厄年の

者に与えていた。

事例C8 佐賀県鎮西町打上では、正月に神棚の端に疱瘡神を祀り、それには、餅を二段重ねにして上の餅にゆで小豆をつけて供える。下には赤い紙を敷くのであるが、このような餅を供えるのは、疱瘡神送りといつて餅に疱瘡をやらせるためだという。

事例C9 大分県弥生町堤内では、正月のトコサン（床の間の鏡餅）の左側の一重ねは、厄神に供えたものだという。

このC1-C9の事例は、特に迎えようとしているわけではないが、大晦日から正月にかけては、厄神・疱瘡神などが年神などと一緒に訪れ来たつていてと考え、これを祀ろうとしている伝承である。枚挙に遑がないというほどではないが、類例はA類型やB類型にくらべて格段に多く、分布範囲も広い。盆行事における外精霊の祀りかたと近似しており、正月には、年神などその靈力に期待したい神々とは別に本来は歓迎されざる神々も訪れると信じられていたこと、そしてそれらをも年神などと同様に祭祀の対象とせざるをえないと考えられていたことが、これらによつて

明らかなのである。

三、雑神の祭祀について

正月の年神祭祀を含め、祭りには、人々がその靈力に期待する神が迎えられるのであるが、祭りに関わる神となると、それら人々が求める神だけではなかつたようである。

各地の大小の神社の祭祀、各地域や家々の祭事を検討してみると、祭祀当事者が強く意識しているか否かは別として、できうれば忌避したいと思う歓迎されざる神々への献饌・接待が多くなされていることに気づく。筆者は今まで、この問題を考えるにあたって、来臨が期待され靈力の賦与が求められる神すなわち主神に対し、それら歓迎されざる神々を雑神としてくくってきた³⁰。従来の祭祀研究ではほとんど無視されてきたことであるが、祭りには主神とともに雑神が祀りを乞うて常に寄つてくると信じられているようであり、困った煩わしい存在であるとはいえず、雑神に対する祭祀も祭りの欠かせない構成要素をなしていたと考へざるをえないのである。さらにいえば、雑神をどこにおりなく祀ることによって、はじめて主神の祭祀が成立する

のだと思われていたようなのである。

古儀を伝えるかと思われる有名大社の例をあげてみよう。伊勢の皇大神宮（内宮）には瑞垣の四隅に人が踏み込めないようにした小さな場所が設けられており、六月・十二月の月次祭と十月の神嘗祭の際の由貴祭には、そこに出され、正宮に朝御饌を奉るのと同時平行的に、案の上に「御饌奉る」と唱えて供饌がなされている。祀る対象となる神の名は想定されていない³¹ようなので、ある種の雑神へのものと考えざるをえない。これは少なくとも鎌倉時代初期まで遡りうることで、『皇大神宮年中行事』に四至神（ミヤメグリノカミ）の祀りとして詳述されている。しかもそこに「荒礪ノ御贄ヲ散供也³²」と記されているように、その頃には現在のような案の上へではなく、やや粗雑に撒き散らす形で供されていたのである。正宮での由貴祭を成り立たせるために、このような瑞垣四隅における雑神への供饌が欠かせないものとして行なわれていることは、注目すべきである。

滋賀県の古社である多賀神社の先食行事も興味深い。この神社の本殿横には高さ一メートルあまりの杭のうえに板をのせた先食台があり、ここには平素も神饌を供え、それ

を鳥が舞い下りてきて食べているのであるが、四月二十二日の大祭を営むにあたっては、わざわざ「先食行事」といつて、十六日と十八日に神饌を丁重に供えている。そして、「この先食行事にもし鳥が神饌を食べてくれなければ、大祭に神饌を献供することができない。」ということは大祭そのものが営めなくなるといっているのである。⁽³³⁾この場合鳥は単なる一生物ではなく、神饌を供しているからには何らかの神霊の具象化した姿だと信じられているはずである。そして、主神でないことが明らかである以上、一種の雑神だと解さざるをえない。すなわち、この例は、鳥(雑神)への献供とその受納が、大祭成立のために欠くべからざるものであることを示しているのである。

大社から、ごく普通の神社に目を転じたい。青森県三戸郡戸来村(現新郷村)では、神社参拝のうちに、ソトマキ(外撒き)といつて、まず神社の外に向かつて近所の神々の名をよんで賽銭を撒くそうであるが、これは、家の振舞いのとき正客とは別に向こう三軒両隣の人々を招くのと似ているといふ。⁽³⁴⁾すなわち、主祭神を拝むのに先だつて(あるいは拝むのと同時に)、周囲の主神ならざる神々に供饌し記ろうとしているのだと解することができる。

滋賀県八日市市の巽之神社の春の大祭では、米四升で御供の調製をしているが、このとき正式の「御供さん」とは別に、蒸し飯を小さく握つた「雉の卵」というものが十二ヶ作られている。この「雉の卵」は、宵宮に早く参拝に訪れた者に渡されるときに、翌日の祭りに、曲物に入れて供えられる正式の「御供さん」の横に納められるのである。⁽³⁵⁾すなわち、「御供さん」の横に副えもののごとく供えられていることや、早く訪れた人に対して祭りに先だつて与えられていることなどから判断して、「雉の卵」は主神へではなく、やはり雑神へ供されるべきものだと考えざるをえない。当事者に明確に意識されているかいないかは別として、ここにも雑神祭祀の一端がうかがえるのである。

このような、とても主神とは思えないような神々への献饌の例は、祭祀の細部に少し注意を払つてみれば、全国の大小の神社の祭りや地域・家々の祭事のなかに多く見いだすことができるのである。⁽³⁶⁾

四、厄神祭祀と正月行事の成立

さて、大小神社の雑神祭祀を少しく検討したうえで、大

晦日から正月にかけての厄神や疱瘡神など好ましからざる神々の祭祀を考えれば、何が言えるであろうか。

いずれも、その靈力に期待される主神としての年神とは別に、それよりやや粗雑に、見ようによつては恐るおそる祀られているのが、これら厄神・疱瘡神であった。しかしそれでも、確かに祀らねばならないと考えられていたのであった。

宮中や社寺の追儺儀礼の影響が浸透していったためか、全国の大晦日行事には、いままで挙げてきたような厄神・疱瘡神の祭祀よりも、厄神・疱瘡神の来訪を未然に防遏したり、最初から退散させようとする例がはるかに多い。有害と思われるものをまずシャットアウトし、好ましい主神（年神）のみを迎え祀ろうとするのは、一般的常識からみれば理にかなったことであるからであろうが、それにしても、各地にあまりにも例外、すなわち厄神祭祀が多く行なわれているのである。

C類型として挙げた諸例は、年神とは異質な神としてやや差をつけながら（多くの場合いくらか粗末な形で）、祀っているのであるが、忌避しているというほどではない。厄神・疱瘡神など好ましからざる神の祭祀も、それぞれの家

においては、正月行事の構成要素として一定の位置をあたえられているのだといえよう。

B類型は、歓待しようとまでしているわけではないが積極的に迎え祀ろうとしている例である。厄神の姿が眼前にあるがごとく話しかけまですて迎え入れている例も多く、これは盆の精霊迎えや奈良県などの正月の福丸迎えなど、家の神迎えには各地でしばしばとられている方法である。

厄神や疱瘡神祭祀が、期間的に年神祭祀と融合しながら、しつかり正月行事のなかに組み込まれていることを感ずるのである。

A類型は、B類型と同じく積極的に迎え祀ろうとしているが、同時に早ばやと送り出そうともしている。全般的に一夜の宿を強調している点、そこには、何らかの知識人による蘇民将来伝承や筑波の神祖尊伝承の影響があるのかもしれないが、厄神祭祀が正月行事の構成要素の一部をなしていることは確かである。しかも、B類型のように年神祭祀とは融合していない。融合を避けるように、年神の本格的祭祀に先だつて祀り鎮送しようとしていることの明らかなる例が多い。

以上の検討から、大晦日から正月にかけての厄神や疱瘡

神の祭祀は、大小神社の祭祀に散見する雑神祭祀の一種であると言うことができる。そしてそれら大小の神社において、祀りを乞う雑神の祭祀がよくなされることによって、はじめて主神の祭祀をとどこおりなく進めることが可能であったように、全国の広い範囲において正月行事の一部に厄神・疱瘡神祭祀が組み込まれていることからみて、正月行事においても、現在の担い手にその意識が明確であるか否かは別にして、厄神や疱瘡神の祭祀が年神（主神）祭祀の成立にとつて前提であるか、あるいは欠くべからざるものであると考えられていた蓋然性は高い。特にA類型の諸事例は、わが国の祭祀が雑神祭祀をまず必要としていたという主張にとつて、たいへん示唆に富む伝承なのである。

註

- (1) 丹野正「厄神の宿」『民間伝承』一六一―一二 昭27・12
ただし、引用文は原文にそいつつ適宜これを要約してある。以下、各事例の引用においても同じ。
- (2) 大島建彦「信仰と年中行事」『日本民俗学大系』7 平
凡社 昭34・3
- (3) 三崎一夫「正月行事における疫神鎮送について」『東北

民俗』五 昭45・5

- (4) 大島建彦「疫神祭祀の民俗」『東洋学研究』27 平成4
・3

- (5) 節分の鬼歎待の伝承については、筆者もエッセイ「節分の鬼」（『白い国の詩』四八六 創童社 平9・2）について触れてある。

- (6) 前掲註(2) 同論文

- (7) 大島氏の厄神・疫神に関する研究は『疫神とその周辺』(岩崎美術社 昭60・9)にまとめられている。

- (8) 『七ヶ宿町史』(生活編) 七ヶ宿町 昭和57・3 六三〇
ページ

- (9) 『飯館村史』三(民俗) 飯館村 昭51・2 一八六ペ
ージ

- (10) 『多摩市史』(民俗編) 多摩市 平9・3 五一―一五
二二ページ

- (11) 『伊勢原の民俗―伊勢原・岡崎地区―』(伊勢原市史民俗調
査報告書2) 伊勢原市 平元・1 一六七ページ

- (12) 大藤ゆき『鎌倉の民俗』かまくら春秋社 昭52・11
二九四―二九五ページ

- (13) 『綜合日本民俗語彙』四 平凡社 昭31・3 「ヤクジン
ガミノタナ」の項

- (14) 『民俗探訪(昭和三十七年度)』 国学院大学文学会民俗学研究会 昭和39・7 三八ページ
- (15) 『郷土の伝承 宮城の民俗誌』 宮城県教育会 昭56・7 第一輯二〇七ページ
- (16) 前掲註(14) 同書 二二二ページ
- (17) 『筑波山麓の村』(年刊『民俗探訪』十年記念号) 国学院大学文学会民俗学研究会 昭38・1 二二六～二七七ページ
- (18) 小林梅次「ヤクジンの宿」『民俗』八五 昭49・4
- (19) 富山昭「静岡県の年中行事」静岡新聞社 昭56・12 一三二ページ
- (20) 山田隆夫「ホウソ神のヤドその他」『近畿民俗』二 昭24・7
- (21) 川野正雄『小豆島民俗誌』 名著出版 昭59・8 六六一頁
- 1ジ
- (22) 『陸前の年中行事』 東北民俗の会 昭46・6 四七ページ
- ジ
- (23) 前掲註(22) 同書 一四五ページ
- (24) 『民俗探訪(昭和三十年度)』 国学院大学文学会民俗学研究会 昭31・12 一一一ページ
- (25) 『神奈川県史(各論編)5・民俗』 神奈川県 昭和52・5 五五九～五六〇ページ
- (26) 『歳時習俗語彙』 民間伝承の会 昭14・1 六八三ページ
- ジ
- (27) 『民俗探訪(昭和三十八年度)』 国学院大学民俗学研究会 昭47・7 六〇ページ
- (28) 文化財保護委員会編『正月の行事』2(鳥根県・岡山県) 平凡社 昭42・5 六五ページ・口絵図一〇六
- (29) 『民俗探訪(昭和四十二年度)』 国学院大学民俗学研究会 昭43・9 二五五ページ
- (30) 拙稿「祀りを乞う神々―雑神への供饌・供養と祭りの成立」『国学院雑誌』九四―一一 平5・11
- (31) 神宮禰宜古川真澄氏のご教示による。
- (32) 「皇大神宮年中行事」『神道大系・神宮編二』 三一四ページ
- 1ジ
- (33) 岩井宏実・日和祐樹『神饌 神と人との饗宴』 同朋舎出版 昭56・8 二四七～二四八ページ
- (34) 能田田代子『農村探訪記』『旅と伝説』一四―九 昭16・9
- (35) 前掲註(33) 同書
- (36) 前掲註(30)の拙稿には、さらにいくつかの事例を掲げておいた。